様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 29 日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010 年度～平成 2012 年度
課題番号：22530904
研究課題名（和文）地方ノンエリート青年の社会的自立と進路指導・キャリア教育の改善に関する研究
研究課題名（英文）A study about improvement of vocational counseling / a career education for the social independence that place the focus on local non-elite young people

研究代表者
浅川　和幸（ASAKAWA KAZUYUKI）
北海道大学・大学院教育学研究院・准教授
研究者番号：30250400

研究成果の概要（和文）：
研究目的は、ノンエリート青年の社会的自立の実態と進路指導実・キャリア教育実践の関係を明らかにすることであった。次の知見を得た。①地域格差は生徒の進路志向の分化に大きく影響していた。②進路指導・キャリア教育は、地域格差の影響を受けていた。③地域に定着するノンエリート青年の社会的自立に、高校生活の「記憶」の影響力は無視できない。④キャリア教育では課外活動も含めた学校生活の質の向上に注目する必要がある。

研究成果の概要（英文）：
It was for a study purpose to clarify the actual situation of social independence of a non-elite and relations of a vocational counseling fruit / a carrier educational practice.
I got the next knowledge.
The area difference influenced course of a student-oriented differentiation greatly.
The vocational counseling / the career education was affected by a local difference.
Social independence of a non-elite settling in a area cannot ignore influence of "memory" of senior high school life.
Extracurricular activities have to pay attention to improvement of the school quality of life that I included by a career education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500000	150000	650000
2011 年度	300000	90000	390000
2012 年度	400000	120000	520000
年度			
年度			
総　計	1200000	360000	1560000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育社会学
キーワード：キャリア教育、進路指導、ノンエリート青年、社会的自立

１．研究開始当初の背景
日本社会において、社会的な格差が広がっている。このことが、学校における進路指導やキャリア教育にどのような影響を与えて

いるのかを、地域格差に注目して明らかにする必要があると考えられた。

２．研究の目的

現在の学校教育の目標は、「生きる力」の形成である。そこで注目されているのが、キャリア教育であった。しかしながら、キャリア教育が生徒に影響を及ぼしうる原理についても、十分考察されておらず、またそれぞれの地域的・家庭的な背景の中で、進路を考える生徒に対応するための具体化がなされてない。そのため、新しい進路指導・キャリア教育を考えるためには、地域的・家庭的な背景の下で、具体的に展開されている進路指導・キャリア教育実践に注目することを考えた。特に、北海道は 2000 年代に入って、主要な産業が衰退し、地域的な疲弊が進んでいる。中枢－周辺の格差が拡大している。そこで、主に高校を事例とした進路指導・キャリア教育実践の事例研究を行うことを考えた。さらに、進路指導・キャリア教育が卒業後の生徒にとってもつ意味を考えるために、夕張市の高校卒業者（OB・OG）の追跡調査を行い、学校生活と現在の社会的自立の関係の検討をおこなった。

３．研究の方法

三つの地域（札幌市、釧路市、夕張市）の比較検討を次の各種の対象に行った。学校に対するインタビュー調査、生徒に対するアンケート調査を、中学校と高校で行った。さらに、高校卒業者（OB・OG）へのインタビュー調査を行った。

４．研究成果

本研究は、ノンエリート青年の「学校から職場への移行」（職業的・人格的・社会的自立プロセス）に及ぼす現代社会の変化の影響と、高等学校において大きく原理的に転換しつつある進路指導・キャリア教育の変化との関係を解明し、それを通じて新しい進路指導実践やキャリア教育実践の提案を行なう目的をもっていた。現在社会の変化とは、社会的格差の地域的拡大、周辺化・縁辺化の急速な進行である。そして、北海道では地域移動を伴いつつ、集中と周辺化・縁辺化が同時進行していた。

本研究では、地域社会の疲弊が日本で最も進んだ北海道の中枢－周辺・縁辺を構成する三つの地域を対象とした。

2000 年代中盤以降の北海道経済の全面的な後退は、札幌市への一極集中とそれ以外の地域社会の疲弊（崩壊と言いうる場所もある）をもたらしている。この社会的格差が地域的な分化として北海道では現象していることを意識し、（集中化を遂げる）札幌市、（周辺化・縁辺化の急速に進む空知地域の中から）夕張市、（基幹産業が総崩れの状態にある中規模都市の中から）釧路市を対象とした。

それぞれの地域調査の成果の詳細については別に報告書を作成したのでそれに譲り、省略をする。結論の部分だけをここに掲げる。当初の計画を拡張した点と縮小した点があり、計画立案時点で予想した結果とは異なるところもある。変更を必要とした根拠とともに研究で得た知見を列挙する。

⑴当初の予想よりもはるかに地域格差を重視する必要があった。特にそれが生徒の進路志向に早期の分化をもたらしている、という知見は重要であると思われる。生徒は、従来において、進路に関する具体的なイメージを高校に入って育むことができると考えられたが、これに地域格差が大きく影響していた。札幌市の高校生は、全体的に、いまだ「ゆとりある」状況にある。確かに、受験競争の影響の早期化は生じていると考えられるが大学定員の余剰もあり、生徒にとっての最後の学校生活は高校生活（高校止まり）ではない。これは釧路市との著しい違いとなった。これらのことは、高校時代の進路指導・キャリア教育の困難の度合いを決定的に変える。

⑵進路指導・キャリア教育の力点が普通科進路多様校に移り、同時にそれぞれの高校における実践が北海道の高校多様化（「特色のある高校づくり」）の影響を受け、多様化している点であった。より、それぞれの学校の事情（学力問題や生徒指導問題）を考慮する必要があった。

⑶夕張市を事例に、「移行プロセス」・社会的自立を、ノンエリート青年の主体的要因を基礎に、地域の家族・企業・文化に踏み込み実態解明を試みた。「血縁」については家族の差が大きかった。「職業縁」や「社縁」は、福祉職の専門職労働市場や企業社会の実在の大きさが重要であった。地縁はもはや「イメージ」的な影響力となっていた。しかしながら、過去の学校生活に由来する「地元つながり」は、様々な機会に喚起されていた。このような意味で、高校は行った直接的な教育実践としてよりは、生徒にとっての生活共同の「記憶」の意味をもち、その影響力は無視できないと思われる。

⑷キャリア教育の陶冶的原理は、「未来の目標構築が現在の生活の規律化を進めること」にあると考えられる。従来のキャリア教育では、進路指導の場面（大学受験や就職等の「出口」）を思考のテコとして展開が模索された（近年は、学習意欲と関連させようとしている）。しかし、これとは別の回路でも、陶冶的原理の実践は模索可能であるように思える。釧路市の公立進学校の進路指導実践と生徒の進路志向の比較対象のために、札幌市の公立進学校の研究を行ったが、ここでは課外活動との両立が重要な意味をもってい

た。このことは、学校における教育実践にどのような意味をもつのか、に注目する必要がある。

⑸当初予測したよりもはるから大きな地域格差を考慮に入れるならば、これからの進路指導・キャリア教育が対応を迫られるのは同じ高等学校であっても、その位置づけは異なると考えられる。進路指導・キャリア教育は、大学入試を目標とできる高等学校で必要となるのではなく、最後の学校生活となる高校で必要となる可能性が、そう遠くない将来に現れるだろうと予測できる。「完成教育」としての後期中等教育を念頭においた時に、進路指導・キャリア教育はどのような課題を、どのような方法で背負わなければならないのだろうか。これには具体的な地域格差が関わるので、具体的な地域を対象として検討されなければならないだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
①浅川和幸、2012 年 12 月、「学校統廃合による中学生の生活と意識の変化—北海道旧産炭地 A 中学校を事例に」（査読なし）、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』、117、1～31 頁。
http://hdl.handle.net/2115/51014
②窪田玲奈、2012 年 12 月、「地元における雇用の潜在性と進路指導のギャップ—夕張を担う地元企業・機関の調査から—」（査読無し）、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』（第 117 号）、北海道大学大学院教育学研究院、113-130 頁
http://hdl.handle.net/2115/51023
③窪田玲奈、2012 年 6 月、「“地方の地方”における若者の『地元つながり』—夕張高校ＯＢ・ＯＧ調査を基に—」（査読付）、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』(第 115 号)、北海道大学大学院教育学研究院、17-56 頁
http://hdl.handle.net/2115/49536
④浅川和幸、2012 年 3 月「疲弊する地域における中学生の生活と意識—釧路市の中学 2 年生を対象に」（査読なし）、『教育学の研究と実践』（特集フォーラム）、７、5～14 頁。
⑤窪田玲奈、2011 年 5 月、「夕張で暮らす若者たちの地元志向・地元つながり」（査読無し）、『教育』(5 月号)、国土社、98-105 頁
⑥浅川和幸、2011 年 3 月、「『財政再建団体』指定移行の夕張市の現状—高齢者調査をてがかりとして」（査読なし）、『教育学の研究と実践』（特集フォーラム）、6、5～12 頁。

〔学会発表〕（計８件）
①浅川和幸、2013 年 3 月 8 日、「公立進学校における課外活動と進路志向——札幌圏の進学校と地方進学校との対比を素材として」、北海道教育学会第 57 回研究発表大会、名寄市立大学（名寄市）
②窪田玲奈、2013 年 3 月 7 日、「地域における主力産業を担う若者の進路形成—夕張メロン生産組合・青年部所属の方への調査を基に—」、北海道教育学会第 57 回大会・自由研究発表、名寄市立大学（名寄市）
③窪田玲奈、2012 年 8 月 26 日、「地方都市における若者の地元志向の変遷—過去の語り直しからの考察—」（テーマ型研究発表 B-6 若者の移行過程変容と学校）、日本教育学会第 71 回大会、名古屋大学（名古屋市）
④浅川和幸、2012 年 3 月 20 日、「学校統合による中学生の生活と意識の変化」、北海道教育学会第 56 回研究発表大会、北海道大学（札幌市）
⑤窪田玲奈、2012 年 3 月 20 日、「地方都市における若者の地元志向—夕張高校ＯＢ・ＯＧ調査を基に—」、北海道教育学会第 56 回研究発表大会・自由研究発表、北海道大学（札幌市）
⑥窪田玲奈、2011 年 10 月 15 日、「夕張で暮らす若者達の生きられる空間」、唯物論研究協会第 34 回研究大会、札幌大学（札幌市）
⑦窪田玲奈、2011 年 10 月 1 日、「地域での若者の地元つながりの今日的意味」（課題研究分科会「Ⅱ子どもの育ちを支える地域からの共同」）、日本臨床教育学会第 1 回研究大会、北海道教育大学札幌校（札幌市）
⑧浅川和幸、2011 年 3 月 21 日、「『財政再建団体』指定以降の夕張市の現状」、北海道教育学会第 55 回研究発表大会、北海道教育大学釧路校（釧路市）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
浅川　和幸（ASAKAWA Kazuyuki）
北海道大学・大学院教育学研究院・准教授
研究者番号：30250400

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
窪田　玲奈（KUBOTA Rena）
北海道大学・大学院教育学院・博士後期課程